

駿建 2018 Oct. vol.46 No.3

日本大学工学部建築学科 日本大学短期大学部建築・生活デザイン学科

# SHUNKEN

*Quarterly Journal of*

*Department of Architecture, College of Science and Technology, Nihon University  
& Department of Architecture and Living Design, Nihon University Junior College*



SPECIAL FEATURE

日本建築学会各賞  
JIA新人賞  
受賞記念インタビュー

SPECIAL FEATURE

# 日本建築学会各賞 JIA新人賞 受賞記念インタビュー

(photo = 堀田貞雄)



この春に、2018年の日本建築学会各賞とJIA（日本建築家協会）新人賞が発表され、日大理工建築の先生方、日大理工建築卒業生の方々が受賞しました。

まず、斎藤公男名誉教授が、アーキニアリング・デザイン展をはじめとした活動と、空間構造デザイン研究室での教育・研究・設計の総合的な実践が評価され、日本建築学会の賞の中でも最も荣誉ある「日本建築学会大賞」を受賞。

重枝豊教授は、自らがきっかけとなり立ち上げ、約40年にわたり、卒業設計展の中心であり続けてきた「レモン展」こと「学生設計優秀作品展」で、「日本建築学会賞（業績）」を受賞。

本杉省三特任教授は、著書『劇場空間の源流』（2015）が、「日本建築学会著作賞」を受賞。

卒業生の馬場兼伸さん、江泉光哲さん、金井直さんが共同で設計を行った「東松山農産物直売所」が、「日本建築学会作品選奨」と「2017年度JIA新人賞」を受賞しました。（※JIA新人賞は馬場さん単独の受賞）

今回の特集では、それぞれの受賞者にインタビューを行いました。インタビュアーは、受賞者の昔のことを知るかつての教え子や先生です。それでは、4つのインタビューをお楽しみください。

Congratulations on the award

日本建築学会各賞  
JIA 新人賞  
受賞記念インタビュー

INTERVIEW 1

構造と空間デザインの融合  
学生とつくり続けてきた50年間

齋藤公男 × 岡田章 × 宮里直也

名誉教授

教授

教授

インタビュアー：廣石秀造 短大助教、大西正紀(mosaki)

—「2018年日本建築学会大賞」の受賞おめでとうございます。今回の受賞は、単体の作品や研究についての受賞ではない、とうかがいました。

齋藤：今回評価いただいた内容にはふたつあります。

ひとつは「教育・研究・設計の総合的な実践」です。これまで約50年間にわたり、主に大学の研究室を通して、多くのプロジェクト（設計）を研究と連動させて行ってきたと同時に、さまざまな教育活動を行ってきました。その軸のひとつが「習志野ドーム」（下写真）でした。

もうひとつは、「アーキエアリング・デザインの理念に基づく建築学会活動への貢献」です。これは前者の延長で、日大や研究室が学

会をバックアップするような形で、「アーキエアリング・デザイン展」というものをさせていただいたものです。研究室としてサポートしてきている「学生サマーセミナー」もこれに含まれます。通常、大賞はひとつの研究などに対して贈られるものなので、今回このような形で受賞できるとは思っていませんでした。

—さまざまなデザインのドーム空間を、毎年学生たちが発案して実物をつくる「習志野ドーム」は、いつごろからはじまったのですか。

齋藤：「習志野ドーム」は1993年から、もう25年経ちます。しかし、それ以前にも、建築学会として教育的な試みを行っていました。最初は新潟などの地方をみんなでまわって、

さいとう・まさお

1938年、群馬県生まれ。1961年、日本大学理工学部建築学科卒業。1963年、同大学院理工学研究科博士前期課程建築学専攻修了。1973～91年、同大学理工学部建築学科助教授。1991年～08年、同大学理工学部建築学科教授。2007年、第50代日本建築学会会長。2008年、日本大学名誉教授。

おかだ・あきら

1954年、徳島県生まれ。1977年、日本大学理工学部建築学科卒業。1979年、同大学院理工学研究科博士前期課程建築学専攻修了。1982年、同大学院理工学研究科博士後期課程建築学専攻単位取得退学。1982～90年、竹中工務店勤務。1990年～、日本大学理工学部建築学科。

みやさと・なおや

1975年、宮崎県生まれ。1998年、日本大学理工学部建築学科卒業。2000年、同大学院理工学研究科博士前期課程建築学専攻修了。2003年、同大学院理工学研究科博士後期課程建築学専攻修了。2003～04年、同理工学部建築学科副手。2004～08年、構造計画プラス・ワン勤務。2008年～、日本大学理工学部建築学科。

各都市で子どもたちにレクチャーやワークショップを積極的に行っていました。すると、小学生くらいの子もたちがとても楽しんでやってくれる。講義を聴いて、建築を、将来、勉強してみたいという子どもが出てくるほどでした。

岡田：当時、建築の分野へ進む若い人が少なくなっていました。そこで、その魅力を伝えるために子どもを楽しませてあげようという試みが、建築の構造の分野では同時多発的に行われていたのです。

齋藤：建築には見えない力学のようなものがあります。そこに教えづらさがありました。デザインと構造の結び付きを教えることも、素材の原理などを教えることも難しいので、いつも悩んでいました。でも、そこをブレイクスルーしたかったのです。割り箸や紙を使って張弦梁の模型をつくったり、いろんなペーパーストラクチャーをつくるワークショップを行いました。一連のこういった試みが、「習志野ドーム」へとつながっていきました。

当時「習志野ドーム」には、高宮真介さんや横河健さんといった日大出身の建築家の方々はもちろん、本杉先生や今村先生など、いろんな方が関わっていただきました。この活動は、国際的なIASS（国際シェル・空間



構造学会)・坪井賞や建築学会・教育賞も受賞することができました。宮里先生が大学院生のときには、日本建築学会の大会会場に10以上のドームを出現させました。これは、大きな話題になりました。

— 何よりも学生自身が1分の1の実物をいちからつくり、できたものを体感できることがエキサイティングです。膜やそれを支える構造材には、やはりその時々々の最先端の技術が詰め込まれてきたわけですね。

岡田：究極の最先端がいつも集まっています。「習志野ドーム」のルールは、3日間の期間中のみ建てていられれば良いというものです。だからこそ、実際の建築物では使えない最新の素材や技術を使うことができるわけです。でもその分、面白い空間をつくるのが求められてきました。

宮里：当時も今も、ケーブルや膜構造をここまで実際に扱える研究室は、他大学も含めてないのではないのでしょうか。

岡田：「習志野ドーム」のようなことを実施する際に、日大理工建築にはあらゆる分野の学者がいることも大きな利点でした。

斎藤：それは大きいです。何かプロジェクトをやっていると、他の先生の琴線に触れる。そこから新しい関係が増えて、より社会とつながり、いろんな経験ができる。教員の人数が多いメリットは、そこにもあると思います。

— しかし、戦略的に研究室の人数を最大限に活かしてプロジェクトに取り組む研究室は、空間構造デザイン研究室以外にはないように思います。

斎藤：そうかもしれません。これからは岡田先生たちもそのことをもう少しアピールしても良いのかもしれません。たとえば、毎年建築学会で行っている「学生サマーセミナー」には200名ほどが集まるのですが、その運営サポートも空間構造デザイン研究室の学生たちが、ずっと行っています。

岡田：他大学と一緒にプロジェクトに取り組むときに見ていると、他大の方々は、必ずまず絵を描いて、計画して、さあ、誰がつくる？となるのですが、うちの研究室の学生たちは、

まず実際に手を動かしてつくろうとする。そこがすごいと思います。

斎藤：昨日もたまたま研究室の卒業生と話す機会があったのですが、みんな仕事で大変なときは、「習志野ドーム」や「学生サマーセミナー」のことを思い出すって言うんです。それくらい卒業後も、彼らのパワーの原点になっているんですね。

— どの活動も学生たちは、やらされている感がまったくなくて、自分で考えて行動しているという感覚が常にあるのでしょうか。

斎藤：さらに手を動かして作るだけではなく、運営したり、学会などと具体的に折衝したり、大人の世界ものぞき見しながらプロジェクトを進めていきます。そういうことがあると、先生も指導しやすいですから、まさに実学としての教育の場としても良いものになっているのです。

#### 空間と構造がタブーの時代からの脱却 その原点は「ファラデーホール」

— 日大理工建築の構造の授業では、ペーパーストラクチャーをつくるものがありますが、あればどのようにはじまったのですか。

岡田：構造計算では、計算尺というものがあって、それまではその使い方を教えていたのですが、もっと楽しく教える方法はないかと、模型をつくってオモリを載せるということで、斎藤先生が教えはじめたんです。

斎藤：僕が30代後半のときで、「ファラデーホール」(1978)の設計を進めながら張弦梁について考えているころ、ペーパーストラクチャーをつくってオモリを載せる授業をやりはじめました。1976年ごろでした。当時、岡田先生は学生で、僕はディテールの図面をT定規で描いていました(笑)。

もっと以前、僕が大学卒業後には、1964年の東京オリンピックへ向けて「代々木第一体育館」(1964)のような建築が、海外では「シドニー・オペラハウス」(1973)などが誕生しました。まさに構造とデザインが交わる時代の到来でした。

しかし、1970年ごろを境にして、ポストモダンの考え方が台頭してきました。すると一気に構造とデザイン、あるいは空間と構造と

いう話がタブーになってしまったのです。私たちが取り組んでいたような研究も、建築界では誰も話題にしない。構造が表現力を持つては駄目だという空気がそこにはありました。そのような中で実現しただけに、「ファラデーホール」は、ひとつのブレイクスルーだったのです。私たちがアクティブに動きはじめた原点でした。今考えると、ポストモダンの時代だったことが、逆にラッキーだったとも言えるかもしれません。

そのあとに「理工スポーツホール」(1985)を設計して、よりハイブリッドな概念を押し出していきました。そのころは、部材のハイブリッドはありましたが、システムのハイブリッドはありませんでした。当初は、周囲からそんなハイブリッドは19世紀に既にあったとさんざん言われましたが、今の時代にこそ大事なんだと言い続けました。結果、その後、ヨーロッパで評価されていくことになるのですが、その状況も含めて面白かったですね。

宮里：ケーブルのような新しい素材がちょうど出てきた時代というタイミングもあって、ハイブリッドな概念が加速していきました。

岡田：評価されない時代が長かったですね。それまでは、日本では空気膜構造が全盛期の時代だったのですが、1986年の「IASS大阪」を契機にハイブリッド熱が高まりはじめました。

斎藤：そのとき、私たちが出した論文がハイブリッドに関わるものだったのですが、偶然、ドイツのヨルグ・シュライヒさんが出された論

「ファラデーホール」内観。(photo = 坂口裕康)



文もハイブリッドに関するものでした。海外の「黒船」からも同じような視点が出てきたことで、一気にハイブリッドへの評価が高まってきました。

建築はファッションのように常に時代の流行があるものなので、その時代にのみ評価されて終わるものです。しかし、私が丹下健三さんの傍で設計を見ていた「代々木第一体育館」から、「ファラデーホール」や「理工スポーツホール」といった日大キャンパス内の建築物、それ以後の試みを含め、50年間に関わってきたプロジェクトは、すべて連続とつながっています。そして、その根底には普遍的な考えがありつつも、いつも学生たちと一緒にくりながら、自分たちの建築の世界が広がっていったことをとても誇りに思います。

— その昔は、「構造の日大」と呼ばれていたと聞いたことがあります。そういった中で、研究はどのような位置づけだったのですか。

岡田：斎藤先生の研究論文は、当初は建築学会内でも一切出されることがありませんでした。海外の論文集か、「日経アーキテクチュア」などの雑誌に掲載されるものしかありませんでした。

斎藤：当時、日大理工の構造の先生たちの中で、構造デザインなんてことを言おうものなら何も取り合ってくれない感じでした。指導していた大学院生が修士論文で「テンション構造」をテーマで発表すると、先輩の教授からは、「君、これはケーブルが切れたらどうするんだ？」と、研究の本質からはずれた質問をしてくるわけです。僕は助教授の立場でしたが、辛かったです。だから、学内ではなく、外のメディアで戦おうと思ったのです。結果、海外へ出て、理解してくださる方にたくさん

出会い、元気をもらいました。

岡田：たとえば、当時は張弦梁の研究について発表する場が建築学会の中にありませんでした。せいぜい応用力学の分野にあるくらいでした。

斎藤：それこそ「ラーメンの日大」と呼ばれていましたから。そんな中で、たまたま僕が日大理工で先生になれるチャンスが巡ってきた。ラーメン構造の大きい壁を越えて、次に空間構造が生まれてきた。こういう大学内の歴史性も面白いものです。

#### 学生たちと共につくり続けてきた理由 チャレンジし続けることの大切さ

岡田：そういう閉塞感から生まれた空間構造デザイン研究室に、今やたくさんの学生たちが入ってきます。大学院生については、年ごとに人数が増えています。

— 従来の構造という捉え方ではなく、空間も含めた捉え方をする傾向は、他の大学の構造系研究室でも起きていることなのですか。

宮里：構造のエンジニアが先生として招聘されるのが、どの大学でも増えてきたので、全体として変わってきていると思います。

岡田：「構造デザイン」という言葉を、多くの人が使いはじめてから変わりました。デザインにも魅了され、構造にも魅了された学生たちは、迷わず選んでくれるように感じます。

斎藤：そうですね。「構造デザイン」という言葉に対する社会的認知が、あるときから随分と得られるようになりました。

宮里：構造設計者としての職能が、社会の表に出るようになってきました。研究が常に表にあって、裏で隠れるように構造設計を行っているような雰囲気がありました。

斎藤：研究をやりながら裏で構造設計の仕事をするなんて、とんでもないと言われていました。僕が、大学院生のときに坪井善勝研究室に所属しながら、丹下さんの「代々木第一体育館」の設計を手伝っていたときも、学内の構造系の人たちに、「大学とは、研究すべきところだろう」とよく怒られました。

— 斎藤先生は、自身で構造設計事務所をつくらうとは思わなかったのですか。

斎藤：一度もありませんでした。何よりも学生と一緒にやること、教育の現場が好きでしたから。これは、バックミンスター・フラーの影響でもあるんです。フラーも事務所を持たずに、その上でフラードームなど世界的なイノベーションを成し遂げていった人でした。その生き方に僕も触発されて、プロジェクトを通して、新しい可能性を学生たちと挑戦していきたいと思っていました。

実は学生たちと一緒にやっていくことが、さまざまな面で一番社会性があるものです。海外の方に、事務所を持たずに学生たちとこんなものをよくつくることができるな、と驚かれるのですが、それほど学生たちのパワーにはすごいものがあります。それに組織事務所やゼネコンも、我々の研究室と一緒に取り組むのはメリットも大きいんです。最先端なチャレンジをして、万が一失敗しても、こちらが責任を取ればいい。だから、常に新しいチャレンジにトライできるのです。

— 学生たちと共につくるというワークショップ

岡田先生（左）、宮里先生（中央）共に斎藤先生（右）の研究室の出身。斎藤先生に出会って岡田先生は45年、宮里先生は21年になる。



形式は、他の研究室や大学でも行われていますが、そのほとんどは、ある期間に行われるもので、空間構造デザイン研究室のような継続性はありません。

齋藤：空間構造デザイン研究室の最大の特徴は、約50年にわたって、研究室に所属する学部生、大学院生たちの手によって、さまざまなプロジェクトを共につくるという形式で、連綿と受け継がれているということです。そこで得られる知恵や経験が、決して途切れることなく、今までつながっている。

リアルに手を動かしながら1分の1のものをつくり、一方で、構造計算を行いながら、構造の細かなディテールまでを研究していく、その振れ幅が、学生たちをより惹き付けているのだと感じました。

宮里：私たちの研究室では、すべてのプロジェクトに学生が関わります。特に構造の実験をほとんどの大学院生が行います。そういったこともある程度プレッシャーはあると思いますが、1分の1の実物を建てていく場面は、学生たちは楽しい反面、建たせなくてはいけないというプレッシャーが、さらに大きいのしかかかっていると思います。

齋藤：体験し続けることは大変なことですが、大切なことです。先日、久し振りにテンセグリティ構造の「虹のシザーズ」をつくらうとしたら、部品が見つからなかったり、どうやって建てるんだっけ？と方法がわからなくなっていました。

たとえば、日本の「祭り」というものは、毎年、継続し、つくりあげていくことで、技能や技術が伝承していくものと言えます。だから、一番大事なものは、継続することだと考えています。構造の分野でも、それによって常に仕組みと仕掛けが共に存在し続けることができるからです。

—「アーキニリング・デザイン展」は、そもそも何が最初のきっかけだったのですか。

齋藤：2000年に私が建築学会の会長になったときに、学会の中で、もう一度きちんと「デザイン」というものを意識してほしいと願って、「建築学とデザインの融合」というメッセージを発信しはじめました。言うだけでは駄目な



2010年に、丸ノ内の丸ビルにて行った「アーキニリング・デザイン展」。

ので、それを何とか形にしないでほしい、ふたつのことを行いました。

ひとつが、「建築デザイン発表会」というものでした。デザインという言葉が学会の中に落とし込むために、学生でも研究者でも誰もが参加できるデザインに関する発表の場をつくりました。これは、毎年、建築学会の大会で継続して行っています。

もうひとつが「アーキニリング・デザイン展」(AND展)です。当時、耐震偽装の「姉齒事件」が起こったこともあって、建築への信頼を取り戻しながらも、魅力を改めて発信しなくてはと考えていました。そのような中で、それには模型を使うのが良いと思いました。建築がつくれる仕組みを見せるタイプの模型は昔からあって、それこそ丹下さんの下で、「代々木第一体育館」の設計を手伝っているときは、まさに仕組みを見せる模型を30個くらいつくっていました。また、通常、建築模型は完成形をつくりますが、我々は自分たちの作品を展示するときにも、何度か仕組みの模型だけを展示したことがありました。建築がつくれる仕組みを示す模型をつくることは、そう簡単ではありません。だからこそ、全国の建築学生たちに挑戦していただくことに大きな意義があると思いました。

—最終的には、いくつかの建築物を取り上げたのですか。

齋藤：150を越えました。全国の建築学生の

皆さんに参加してもらおうとは言え、やはり日大の学生がたくさんいるからこそ実現したこともありました。実際、150のうち100近くを日大の学生諸君につくってもらいました。

実際に150もの建築のつくられる仕組みを表現した模型が並ぶと、歴史や様式も飛び越えて、すべてをフラットに見ることができます。たとえば、エッフェル塔の横にスカイツリーが並ぶと、今も昔も同じ普遍的なことがいっぱい見えてくるんです。人間の知恵や情熱もそうですよね。

「アーキニリング・デザイン展」では、空間構造デザイン研究室が目指してきた“空間と構造の融合”を、ひとつ形にすることができました。その後、9年間のうちに国内を12箇所、海外(台湾・中国)を7箇所巡りましたが、今でも建築学会の会館ギャラリーで、毎年「ミニAND展」を行っています。

—今回の受賞で、改めて今後について考えることはありますか。

齋藤：海外においても目まぐるしく建築の世界は発展していく中で、日本で建築の面白さを、もっともっと発信していけないといけないと思っています。あとは、これまで世界の建築や歴史に関する本はいくつか書きましたが、今回お話しさせていただいたような、空間構造デザイン研究室としての活動は、まだまだとめていません。それはしっかりやらなくてはいけないと思っています。 ■

Congratulations on the award

日本建築学会各賞  
JIA 新人賞  
受賞記念インタビュー

## INTERVIEW 2

# 「レモン展」のはじまりは 学生時代の発案から

## 重枝 豊 × 松永直美

教授

レモン画翠代表取締役

インタビュアー：古澤大輔 助教、加藤千晶 助手

左から、重枝先生と松永さん。重枝先生とレモン画翠との関係は、社長の代が変わっても続いている。

— 今回、長年開催されてきた「学生設計優秀作品展」、通称「レモン展」の建築設計教育に対する貢献が認められ、「2018年日本建築学会賞（業績）」が贈られました。この賞は、「1978年に学生の発案とレモン画翠の協力によりはじめられた」とあります。この学生が、学生時代の重枝先生だった。先生とレモン画翠は、そもそもどんな関係だったのですか。

松永：その昔、重枝先生が学生だったころのレモン画翠は、日本大学や東京大学の建築学生たちが遊びに来ては、よく「こういうものをつくったらいいじゃないか」と提案していたそうです。それで製品化されたものは、いくつもあります。レモン画翠のスタッフには建築を学んだ人がいませんでしたから、そういう提案をどんどん取り入れていきました。

重枝：銀糸が入ったスケッチブックをつくってくれ、と頼んだことがありました。ドットが入ったスケッチブックはあったけど、印刷されないグリッドが入ったスケッチブックがなかったのです。お願いしたらつくってくれました。

レモン画翠の二代目の社長、松永和夫さんは画家だったので、当初は藝大や高校の美術関係に画材などを売っていたそうです。それが、僕が学生のころに、建築にも力を入れはじめました。

松永：レモン画翠の二代目の奥さんは翻訳家だったこともあって、当時、アメリカのハーバード大学の建築学科用の模型材料店「シャレット」を訪問して、日本でははじめて模型材料を仕入れて、売ることをはじめました。

重枝：当時、レモン画翠がただのチラシを配っていたのを見て、それではもったいないと、大川三雄先生たちと、2年生から駿河台に来る学生たち向けのリーフレットをつくりました。設計課題の資料に合わせて、レモン画翠の紹介や建築を学ぶための参考文献とかも入っていて。今の「デザイン基礎」の冊子の原型ですよ。

### 卒業設計で大学を超えた交流をつくる 3年生の重枝くんがレモン画翠に直談判

— そこからレモン展というものは、どのようにはじまったのですか。

重枝：当時は、他の大学で、どんな卒業設計がつけられているのかを全く知ることができませんでした。雑誌「近代建築」で、毎年、図面だけは見ることはできたのですが、模型はもちろん、それ以上のことを知る術がありませんでした。もし、他の大学の先輩たちの卒業設計の作品を実際の図面や模型で見る

しげえだ・ゆたか

1954年、山口県生まれ。1977年、日本大学理工学部建築学科入学卒業。1980年、同大学院理工学研究科博士前期課程建築学専攻修了。1980年、同大学院理工学部海洋建築工学科副手。1983年、同大学院理工学研究科博士後期課程建築学専攻単位取得退学。1989年～、日本大学理工学部建築学科。

まつなが・なおみ

レモン画翠代表取締役社長。東京都生まれ。2016年、大阪大学大学院博士後期課程 工学研究科環境・エネルギー工学専攻単位取得退学。2017年、大阪大学大学院工学研究科環境・エネルギー工学博士取得。2010年～12年、日本建築学会理事。

※本受賞は、下記の連名によるもの

- ・レモン画翠
- ・小林正美（明治大学教授）
- ・重枝 豊（日本大学教授）
- ・学生設計優秀作品展組織委員会

ことができれば、自分たちの卒業設計に向けてどれだけ刺激になるだろうかと思ったわけです。

もうひとつ、大学を越えた建築学生同士の交流がなくなってしまった、という背景もありました。学園紛争が起きるまでは、これからの建築はどうあるべきか、ということ議論し合う「日本建築学生会議」という組織がありました。ところが、学園紛争によって、各大学のあらゆる運動体に対して疑惑の目が向けられ、ほとんどがなくなってしまった。でも、卒業設計を軸に大学同士がつながることができれば、これは運動体としては見られないのではないかと。

この企画を持って、店長の加賀敏博さんをお願いして、学部3年生の僕は、レモン画翠の社長さんに会いに行っただけです。プレゼンしたら、「なんでレモン画翠がそんなことをしなくちゃなんないの？」って（笑）。でも、きちんと説明し続けていたら、「じゃあ、1回だけやってみよう」と。予算はそれほどなかったんで、学生が主体となり、設営も自分たちの手で行い、場所をレモン画翠に提供してもらうことになりました。そのことを近江榮先生に伝えると、早速いろんな大学に連絡をしてくださって、実現に至りました。

— いくつかの大学が参加したのですか。

**重枝**：第1回は、旧日仏会館を会場に、7大学が集結しました。大学ごとに見事にカラーがあることに驚きました。日大理工は堅めの建築だったのですが、東大などは、アメリカの新しい傾向を取り入れながら、この先の建築とはどのようなものかを考えた作品でした。日大理工では、世界の傾向など教えられていなかったのが、ショックでした。

— 最初は、日大理工の学生たちだけで運営をはじめたのですか。

**重枝**：もちろん、自分だけではできません。そこで、まず「学生交流会」という団体をつくりました。これは、1年生から4年生までの誰でも参加できるもので、基本は2カ月に1回講演を企画していきました。近江先生にお願いして、前川國男さんや菊竹清訓さんなど、名だたる建築家の方々に来ていただきました。毎回、講師の建築家の資料を青焼きでつくっていました。2回連続で参加しなかったら、次回からは参加できないというルールがあって、どの回も満席でした。そういう学年を越えた組織の活動の一環として、レモン展もつくっていきました。

— 1回だけということではじまったレモン展は、その後も続いたのですか。

**重枝**：次の年も、「もう1回だけ!」と言いながら、させていただきました(笑)。2回目は、800人も来場者があって、入場制限をするほどの熱気でした。やがて、社長が役に立てるのであれば、と継続させていただくことになりました。続けていくと、学生だけではなく、建築関係の会社で働く人ももちろん、駿河台のまわりに住んでいるご婦人たちも来てくださるようになりました。地域とこんな形でつながれたことも驚きでした。

**松永**：その後も順調に運営されて、会場も、旧日仏会館からはじまって、文化学院や磯崎新さん設計の旧お茶ノ水スクエアと移っていったのですが、2000年ごろになると参加学校の増加と規模の拡大で、一時期はお茶の水を離れました。同時に協賛をいただくことも難しくなり、継続して開催することが難しくなりましたが、学生組織委員会の先生方の提案で、出品・登録料をいただくようになり、

会場も明治大学が無償提供してくださることになって、なんとか今まで継続することができました。

### 他の卒業設計展と違うレモン展の強み レモン展は建築を学ぶもうひとつの場

— レモン展は、その時代の学生たちに“教育の場”を提供してきていると思うのですが、多くの卒業設計展がある中で、レモン展にはどのような特徴があるのでしょうか。

**松永**：今はたくさんの卒業設計展がありますが、まずレモン展は、誰もが自由に参加できる卒業設計展ではありません。各大学で優秀な作品が1点選ばれ、それらが一同に集結するものです。そこに最大の価値があると考えています。だから、これまではその中から賞を決めることはしませんでした。

ただ、数年前から、組織委員会の先生方からの提案で、賞を与えようということになりました。賞を決定する講評を行ってしまうと、大学対抗といった空気が生まれてしまうので、私たちは反対したのですが。

**重枝**：レモン展に参加する学校は、大学もあれば専門学校もあります。それらの優秀な作品たちを、みんなフラットに見ることができ。こんな卒業設計展は、他にありません。中には、ようやく参加できるようになったという学校もあるんです。だから、そこに展示されているものを見て、ランク付けするものではないんです。そのため、レモン展で賞を与える講評の中で大切なのはプロセスなんです。決して、賞を決めることが目的ではない。そこで交わされる議論のやりとりに価値を置きたい、ということを共有しています。

— 僕が学生のころは、レモン展に出展できることが、建築学生にとっては最大のステータスで、それは社会に出ることと同義でした。出展する学生たちは、名刺を交換する文化があったり、大企業の方々も見廻っていて、インターンに誘われる光景がそこかしこにありました。

**松永**：学生さんたちの作品の傾向も随分変わってきました。それこそ昔のものは力強く、作品が宇宙へ行ったり、地中に潜ったり。

それが、今はどの学生の皆さんも、目線がデザインというよりは、人の営みや人間としての視線に重点を置いたものが多いです。

東日本大震災以降、本当に変わってきていると日々感じています。昔は、4年間のすべてを卒業設計に注ぎ込む感じがあったのですが、そういう部分でもおとなしくなったように思います。昔は男子学生がほとんどだったのに、今は逆転してしまいました。

**重枝**：変わりましたが、大切なのは、各大学から選ばれた個人が、今の時代に対して、どんな提案をしているのかということです。おとなしく感じるの、だんだん時代に対する取り組み方、提案の仕方が、みんな似たり寄ったりになってきていることもあると思います。そういうスタンスを示せば、最初のところは評価を得られるだろう、と思いついて入る学生が増えてしまっている面もあるかもしれません。

しかし、どのような状況になったとしても、レモン展は継続していかなくてはいけないと考えています。レモン展は、コンペとは違います。コンペは、次の時代のために何が提案できるかということですが、レモン展は、そのひと個人の本当にやりたいことを、学生時代の最後に、社会に披露できる場所なんです。だから、本当は時代に合わせるのではなく、あなたのやりたいことをやりきる場なんだよ、ということなんです。その理念は、残していきたいですよ。

— 卒業設計は、時代と呼応しているものだという一方で、作者の世界観が表明されるべきものだと思います。レモン展は、最も多くの学校から、その世界観が集まり、それが40年以上アーカイブされていくところに、さらなる価値があります。今後のレモン展に期待することはありますか。

**松永**：学生さんたちの作品が、表現として軽く見えてきているとしても、どれもが真摯に社会に対して向き合っていることがよくわかります。逆にそのことに対して、いつもすげえな、と尊敬させられます。作品を通して、社会に対して、自分はこういう見方をしているんだ、と語りかけるものを一同に見られることは、私たちとしてもとても幸せなことです。これからも、できるかぎり継続して開催できるように尽力させていただきたいと考えています。■

Congratulations on the award

日本建築学会各賞  
JIA 新人賞  
受賞記念インタビュー

## INTERVIEW 3

建築は、できすぎてもいけない  
適当な具合が必要

本杉省三 × 佐藤慎也

特任教授

教授

インタビュアー：堀切梨奈子 助手

左から、佐藤先生と本杉先生。佐藤先生は、本杉先生の研究室（小谷・本杉研究室）出身であり、11年間、本杉先生の研究室の助手を務めていた。

— 受賞の対象となった『劇場空間の源流』（2015、鹿島出版会）を読んでみて、場所、時間、コンテンツなどが幅広い一方、全体を通して劇場をどのようにお客さんのいる場所にするのかということがフューチャーされていると感じました。

**本杉**：僕が留学をしたきっかけは、「新国立劇場」（1997）の計画の手伝いをしていたことからです。当時の日本では、オペラ公演の回数も少なく、制作環境も限定されていたので、本場のドイツへ行ってみようと思いました。最初は、機能的・計画的な問題を解こうと志していましたが、実際に行ってみると多様性に富んでいる。技術部に席をもらって研究した2つの劇場、オペラハウスともうひとつの「シャウビューネ」（下写真）で行われていることは全く対極にあり、舞台ができていく場所としての劇場には、幅広い可能性があるのだと思いました。

シャウビューネ劇場。ハムレットの舞台の上に別の演目の客席がつくられている。

ドイツには、「ザッハリヒカイト」という言葉があるように、合理的にものごとを考えていく側面があり、建築もそのようにつづられています。一方、イギリスを訪れると、お金がないからこそその工夫やデザインの知恵が感じられ、さらにいろいろな可能性があると思いました。そして、ドイツに戻って改めて見ると、客席に自然光が入るものやホワイエと客席の区別が流動的なものもあり、日本で聞いていた「こうあるべきだ」という劇場とは、随分と違うと感じました。留学中には、歴史的劇場に触れる機会もありました。そういったものに触れると、劇場は権威的なイメージが強いけれど、人に喜びをもたらすものとして生活に近いものだと思いました。

**佐藤**：日本に帰ってきてから実際のホールに関わりはじめたのは、どのようなきっかけでしたか。

もとすぎ・しょうぞう

1950年、神奈川県生まれ。1972年、日本大学大学院理工学研究科博士前期課程建築学専攻修了。1972年、同大学理工学部建築学科助手。1977～81年、文化庁文化庁嘱託・非常勤職員（第二国立劇場設立準備調査担当）。1981～83年、ベルリン自由大学演劇研究所留学、ベルリン・ドイツオペラおよびシャウビューネ劇場特別研究員、DAAD（ドイツ学術交流会）奨学生。1999～2015年、日本大学理工学部建築学科教授。

さとら・しんや

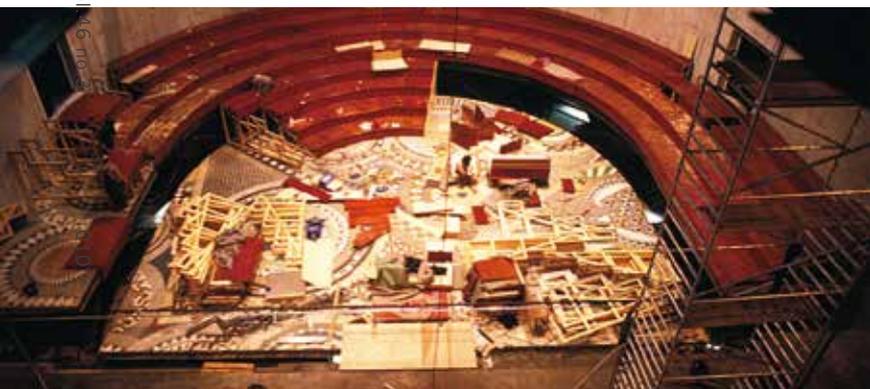
1968年、東京都生まれ。1992年、日本大学理工学部建築学科卒業。1994年、同大学大学院理工学研究科博士前期課程建築学専攻修了。1994～95年、I.N.A. 新建築研究所。1996年～、日本大学理工学部建築学科。



**本杉**：「新国立劇場」と前後して「愛知芸術文化センター」（1992）のコンペがあり、「Bunkamura」（1989）も同時期にやりました。大きいプロジェクトで、いずれも1等案に関わって運が良かった。また、コンペ案に関わっていく中で、技術的なことだけでなくデザインのところまで話せたことも良かった。それらの設計者は当時劇場を設計したことがなかったので、舞台やオーケストラピットの大きさ、搬入と配置計画など、すべて「なぜ？」からはじまります。それらに理由を見つけて答えていこうとすると、自分も知らなかったことが次々と出てきました。

**佐藤**：そのときに、演出家や技術スタッフなど、作り手たちの話を聞かれたんですね。

**本杉**：劇場を研究するために「東京文化会館」（1961）でオペラの調査をはじめた当時、現場の人にとって建築家は悪者で、いかに劇場を機能的に知らないか、という話ばかり聞かされました。一方で、彼らは建築家の名前は知っていて、どこかで尊敬の念も持っていました。ヨーロッパの劇場に行ってみると、内装もきらびやかで、中には自然光も入ってくる劇場やホールがあるのに、なぜ日本ではそうではないのか。たとえば、そういう話をつくり手たちとしていくと、提案の可能性が



広がっていくと気づきました。

**佐藤**：最初にプロジェクトをご一緒にされたアトリエ事務所の建築家はどなたでしたか。

**本杉**：伊東豊雄さんの「長岡リリックホール」（1996）、谷口吉生さん、高宮真介さんの「つくばカピオ」（1996）をほぼ同時期にやりました。そのあとに磯崎新さんの「なら100年会館」（1999）、シーラカンスの「ビッグハート出雲」（1999）をやりました。

#### 現代における建築計画とは何だろう？

##### そのとき、教育に求めるもの

**佐藤**：日本の古い劇空間には、いつごろから興味を持たれはじめたのですか。

**本杉**：体験的な記憶としては、春日大社で出会ったおん祭が強く心に残っています。歌舞伎が凄いと思ったのは、1990年代に「シアターコクーン歌舞伎」を観てからです。「歌舞伎座」よりも「シアターコクーン」で観たほうがはるかに面白い。劇場のスケールが大事なんだと思いました。また、歌舞伎の専用劇場でないほうが、花道がないことで新たな演出ができると思いました。「夏祭浪花鑑」という演目では、主人公が梯子の上に担がれて花道に出てくるシーンがあるのですが、「コクーン」には花道がないので、梯子に乗りながら縦通路を降りてくるんです。やっているほうも、観ているほうもハラハラする。そういう臨場感が大切だと思います。

**佐藤**：花道だと、用意されすぎているということでしょうか。

**本杉**：劇場に限らないかもしれませんが、良い計画や設計をしすぎてしまうと駄目になる場合があります。たとえば、唐十郎の赤 TENT を普通の劇場でやったら、かっこいいんだけど、つくられすぎていて、芝居の魅力が大きく損なわれてしまう。「コクーン歌舞伎」では、水引幕を使わないことで、舞台が広く感じられます。

**佐藤**：そう考えると、建築計画とは何なのでしょう。

**本杉**：上手くつくらなくてはいけないけれど、できすぎてもいけない。適当な具合が必要で

す。坪井善勝さんは、「Structure' beauty can be found near its rationality」（構造的な美しさは合理性のそばにある）と言ったそうです。「is」ではなく「near」。月と地球の距離は、宇宙から見るとほんの少しだけれど、地球に住む我々から見たら、計り知れないほど遠い。そんな気持ちです。何が建築の良さなのかは、本当に解釈次第だと思います。

—花道や水引幕の話は、本の中で触れている「つくった後の人たちの分も取っておいた方がよい」という話にもつながりますか。

**本杉**：それは、ベルリンに行って最初に思ったことです。「ベルリン・ドイツオペラ」は、1961年にオープンしてからも増改築を繰り返しているのですが、僕が行った1981年までベルリン市の建築担当者の常駐オフィスが劇場内にあったのです。劇場にはこの役が必要だと思っています。劇場は、運営する人たちがどうするか、動き出してから変えることができる余地があると良いと思います。一番わかりやすいのはサイン計画です。サイン計画は、竣工した後にやらないと紙がベタベタと貼られてしまう。コンクリートで固める部分は、我々が想像力を振り絞ってつくるしかありませんが、多少の改修で済むサイン計画などは、余分なお金がかかったとしても後からやったほうが良いと思います。

**佐藤**：建築が計画・設計する範囲を、もう少し手前の段階に位置づけたほうが良いのかもしれないですね。

**本杉**：躯体の工事が終わったところで見直したほうが本当は良いと思います。契約や申請があるので今の制度では難しいですが。

**佐藤**：改修の設計をした「3331 Arts Chiyoda」（2010）では、最終的には、運営者が展示壁やサインを自分たちで施工しています。僕は、構造や法規に関わるころ以上はやっていません。まさに今話している感じになっていて、使いやすいと言ってもらっています。新築でも、計画や設計側の意識が完成品をつくることを求めすぎなければできると思えます。そこは、考え方や気持ちの問題なので、難しいところですが。

**本杉**：建築が何年も経てば変わっていく必然を、設計者も受け入れないといけないと思

ます。竣工写真だけ綺麗なものをつくっても仕方がないので、長く生きていく建築をつくっていくことが大切です。

**佐藤**：大学の教育において、どのようにそれを取り入れていくのが良いでしょう。

**本杉**：やはり、リノベーションの課題ですね。ただ、リノベーションの中にある創造性を指導する側が判定できるのか、という点が難しいと思います。教員側が、学生に、何が悪くて何が良いのかということを伝え、表明することが大事だと思います。

—最後に、本杉先生の考える面白い劇場を教えてください。

**本杉**：劇場は、中身を合わせないと判定しにくく、建築物だけで素晴らしいとは言えません。建築が良くなくても、中身が良ければ感動する。そんなことを言わずに素直に言うと、建築家として興味深いのは、ハンス・シャロウンです。彼の建物を見ていくと、この人は何を考えてつくっているのかといつも考えさせられます。

**佐藤**：一方で、シャロウンが素晴らしい建築家なのかと言われると、ホール以外の彼の建築はそんなに面白いわけではないですね。劇場は、前提として活動があるので、単に建築のデザインだけでは決めきれないものもある。シャロウンに関しては、彼とホールという組み合わせが良かったですね。

**本杉**：そう考えると、最近の実績を重んじる傾向は良くないと思います。実は著名なホールや劇場は、建築家がはじめて取り組んだものが多いです。シャロウンの「フィルハーモニー」も、パリの「オペラ座」もそうです。はじめてなので、機能的に良くない部分もありますが、建築であれだけの人を呼べるのだから良いと思います。シドニーの「オペラハウス」だって、あのシルエットはどこにもない、感動ものです。別の用途に使っても良いと思います。

**佐藤**：機能的に使いにくいと言っても、限度はあると思います。要するに、チューニングの問題ですね。

**本杉**：“near rationality”です。 ㊦

Congratulations on the award  
日本建築学会各賞  
JIA 新人賞  
受賞記念インタビュー

## INTERVIEW 4

# 日大OB 3人の共同設計が生んだ 「東松山農産物直売所」

馬場兼伸 × 江泉光哲 × 金井直 × 渡辺富雄

B2A architects主宰

4FA 共同主宰

カナデザイン代表

特任教授

インタビュアー：古澤大輔 助教

左から、馬場さんと江泉さん。

— この度は、受賞おめでとうございます。馬場さんは、今回、「東松山農産物直売所」で、「2018年日本建築学会作品選奨」と「2017年度JIA新人賞」を同時に受賞されました。「JIA新人賞」は馬場さん単独で、「作品選奨」は江泉さん、金井さんと連名で受賞されています。馬場さんが若色研、金井さんは高宮研、そして江泉さんは今村研の卒業生で、全員が本学のOBなのですが、3人で共同設計することとなった経緯からお聞かせいただけますか。

「東松山農産物直売所」内観。

馬場：最初は基本構想のプロポーザルの段階で、独立していただいた江泉さんに「一緒にやってみない？」と誘ったのがきっかけでした。その後、話が進み、基本設計に入る段階で、金井さんにも声をかけて参加してもらいました。

金井：僕が加わったときには、既に馬場さんと江泉さんとの間で基本的な案というか考え方が共有されていたのですが、それを見て、面白そうだな、と感じたので、「一緒にやらせてください」とお願いしました。

ばば・かねのぶ

1976年、東京都生まれ。2001年、日本大学大学院理工学研究科博士前期課程建築学専攻修了（若色峰郎研究室）。2002年、メジロスタジオを古澤大輔、黒川泰孝と共同設立。2013年、B2Aarchitects設立

えいずみ・みつあき

1981年、埼玉県生まれ。2006年、日本大学大学院理工学研究科建築学専攻修了（今村雅樹研究室）。2006～11年、メジロスタジオ。2011年、F4Aを木原圭崇、中林仁子と共同設立。

かない・ただし

1978年、茨城県生まれ。2000年、日本大学工学部建築学科卒業（高宮真介研究室）。2002年、法政大学大学院工学研究科建設工学専攻修了。2005年、複数の建築設計事務所を経て独立。

わたなべ・とみお

1951年、新潟県生まれ。1976年、日本大学工学部建築学科卒業。1978年、同大学大学院理工学研究科博士前期課程建築学専攻修了。1978～81年、森京介建築設計事務所他。1981年～、日本大学理工学部建築学科。

— そうだったんですね。ちなみに、それぞれの役割は、どのようなものだったのでしょうか。

馬場：僕は全体のフレームワークとクライアントが主でしたが、設計プロセスと形態や空間性が直結するような方法を取ったので、正確にはフレームワークのメンテナンスに奔走する何でも屋という感じてした。

江泉：僕の役割は、ワークショップなどを行い、直売所を日々活用する生産者たちの意見を吸い上げたり、建築確認申請関係の整理を担当していました。

金井：僕は途中参加だったので、最初は、ブレインストーミング要員というような意識で参加していました。

馬場：江泉さんには、プロジェクトの中で、マルチにいろいろと担当してもらいました。一方で、金井さんには、特に実施設計での具体的な検討を引っ張ってもらいました。CGや図面での検討、法令や材料などの情報収集や整理の早さには本当に助けられました。それが、物としての作品の強度を大きく上げていると思います。「K型ブレース」も、金井さんとの議論から生まれたものです。

—なるほど。よくわかりました。皆さんは学生時代から知り合いで、意思疎通もよりスムーズだったんじゃないかなと想像しますが、逆に良く知っているからこそそのやりづらさみたいなものはありましたか。

**金井**：もちろん、実際の作業の中で苦労はいろいろとありましたが、僕は楽しい以外のものはありませんでした。

**馬場**：金井さんは、学生時代からいつも紳士的なのですが、それでも火花を散らすことも多々ありました（笑）。

**金井**：簡単に同調してはいけないっていう意識は、確かにありました（笑）。

**江泉**：僕は、結構、複雑な立ち位置でした。なぜなら、かつて古澤さん、馬場さんが共同主宰されていた**メジロスタジオ**のスタッフとして働いていたからです。師弟関係と言うと大げさかもしれないですが、意識はせざるを得ませんでした。でも、僕は、もう一人の建築家として独立していたので、メジロスタジオを巣立った姿を見てもらおうと、今回のプロジェクトでは、馬場さんと同じ立場できちんと発言しようと心がけました。だから、いつも3人が対等な関係だったと思います。一方で、馬場さんと金井さんが同級生なので、そこにまた複雑さはあったのですが（笑）。

—なるほど。それは結構複雑ですね（笑）。でも、こういった複雑な状況を束ねる指標として、今回の作品のコンセプトである木軸グリッドの「プラットフォーム」が、共同設計者の中でもコミュニケーションツールとして有効に作用したのではないかと話をうかがっていて思いました。

#### 素朴さの中に工夫を凝らした 大空間建築

—渡辺先生は、馬場さんが学生だったころの指導教員でもあります。渡辺先生から見て、本作品をどのように感じましたか。

**渡辺**：「東松山農産物直売所」の空間は、伸びやかで、凄く良いと思いました。構造の「K型ブレース」というアイデアも。通常、斜めに部材の節点同士をつなぐのが僕たちの感覚だけど、それを柱に伸ばすというのがユニークでした。筋交いというのは柱と土台をつなぐものだから、普通に考えていてもこうはなりません。

—応力の伝達を意匠的に解くというのは、構造的な知見がなければ決定できないものです。今回、構造設計を担当されたのは、本学卒業生で、齋藤公男先生の研究室を出られた多田脩二さんです。多田さんとは、どのようなやりとりがあったのでしょうか。

**馬場**：多田さんはどちらかというと、後ろから見守ってくれた感じですね。というのも、意匠が描く形態が先にあって、構造家がそれを成立させるというプロセスではないんです。多田さんは、ある制約の中で、どう動いても構造的に破綻しないルールを提示してくれました。だから、設計中にしょっちゅう顔を合わせて話す必要がありませんでした。とは言え、この仕組みはどこでも実現されていないものですから、監理段階ではとても苦戦しました。多田さんは、システムと個別解を共に面倒を見てくださり、「K型ブレース」のような全くの新構法については、実験で確認して筋を通してくれました。

—僕も現地に行かせてもらいましたが、この「K型ブレース」は、平面的なスタディと展開図による高さ方向のスタディが、同時に行われている気がしたのですが、その辺はいかがですか。

**江泉**：当初、馬場さんの頭の中にあっただくり方は、高さ方向の指定ってそんなに強くなかったと思うんです。でも、3人で検討していく中で、こういった大空間の建築で、いろんな人が関わる場合に、やっぱり強いルールみたいなものを持っていないと、設計が前に進まないっていうところが出てきました。

**馬場**：確かに、途中から、高さ方向の超越性というか、頭上で束ねる意識が強くなりま

「東松山農産物直売所」外観。





「東松山農産物直売所」内観。



左から、金井さん、古澤先生、渡辺先生、馬場さん、江泉さん。

したね。斜材の配置や角度の検討に相当労力を割いているけれど、平面図に全く表れないというのも良かったです。

江泉：45度ですね。

馬場：そう。この45度の頬杖というのが、一番基本的なエレメントなんです。頬杖でスパンを短くするという考え方です。梁成を柱径と同じにすることで、たくさん必要になり、脇役が統合するものになっていきました。屋根も45度のトラスにしています。

渡辺：3つの屋根が綺麗なシルエットをつくり出していて、ロケーションと良くマッチしていると思います。

— 電車からも良く見えますので、3つの屋根は面白いシンボル性も獲得しています。

学生時代の体験は、必ず将来に生きる自分で考える力を身に付けて！

— 今日、馬場さんの指導教員だった渡辺先生がコメントをくださっていますが、金井さんと江泉さんが学生だったころ、指導の先生から学んだことを、改めて教えていただけますか。

金井：僕は、高宮研究室に所属して、学部で卒業しました。なので、大学院を経験した方と比べたら、先生とそれほど濃密な時間を過ごせていないと思います。でも、高宮真介

先生といくつものやりとりをする中で、「建築の社会性」みたいなものを最初に意識させられました。建築の形態を決めることは、本当にシビアなことです。だから、いつも先生に「この形態を本当に真剣に考えてるの?」と、強く言われたことを覚えています。そういったことは、すべて今につながっていると実感しています。

— 今回の作品は、より社会的かつ公共的にワークショップを導入して、建築の形態を決定していきました。

江泉：僕は、今村研究室の4期生です。研究室には、4年生、大学院1、2年とほぼ3年間いたわけですが、当時は、研究室で取り組んでいたアートイベントなどを担当して、よく子ども向けのワークショップを行っていました。その中で、いろんな方と知り合い、プロジェクトをどう運営し、完成させていくのかについて、たくさん学びました。今、金井さんがおっしゃっていた建築の社会性とは別の意味で、社会的な関わり方を現場で学びました。今回の「東松山農産物直売所」での生産者たちとのワークショップは、そういった経験があったからこそ、実現することができたという感覚があります。

— 大学での学びが、自分の設計事務所を構えて、独立した後も役に立っているということですね。

江泉：それは本当にそう思います。建築をつ

くるときには、とにかくいろんな方からの意見をくみ取る必要があります。だから、研究室での活動や体験は勉強になりました。あと、僕の場合は、メジロスタジオという設計事務所の中で濃密な時間を得られた経験も、今に活きていると感じています。

メジロスタジオには、古澤さんと馬場さんの他にも、黒川泰孝さん(高宮真介研究室卒)という3人のボスがいたのですが、その3人は、性格も違えば、意見が毎回違うんです(笑)。その中で、事務所で所員が僕1人だけという(一同笑)。でも、あの状況は、他者の意見をうまく自分の中で消化して、施主の特徴に合わせて対応する、引き出しを増やすためのトレーニングになりました。誰かにパスをするときに、どのパスが一番有効かを、常に考えながらコミュニケーションを取り続けるような感じです。

— そうですか。そう言ってもらえると、私たちとしても救われますね(笑)。では、最後に馬場さん、学生に向けて一言お願いします。

馬場：月並みですが、考える力を付けてほしいと思います。既成の枠組みに頼れなくなってきている上に、その変化も一様ではない現在。「動き」を意識してもらいたいです。「動き」を考えると「動かないものごと」にも目が向いて、両者の間に起きていることに気づけるかもしれません。でも、座学でも日常生活でも、目の前の答えだけに固執せず、自分なりの見解を持てれば楽しいと思います。 ■

## 今年も竹を使った製作物に挑戦しました

text= 酒匂教明 短大教授

今年度で、サマーセッション科目「ものづくりワークショップ」は12年目を迎えます。最初は、八王子セミナーハウスで版築によるベンチなどを製作、その後、製作物は竹に移行、数年前から場所自体を船橋校舎に移し、学内で製作風景を知ってもらう仕組みにしました。

実施日は、例年と同様オープンキャンパスの翌日から3日間です。参加者は短大1年生が37名。6グループに分かれた各班での話し合いを経て、案を練り、設計をして製作に臨みます。今年度は、例年に比べ参加者数が多く、女子率が50%に近いのが特徴でした。

初日は、竹自体を入手するため、竹林まで伐採に行きます。北総公団線秋山駅から歩くこと10分程度、ここ数年ご協力をお願いしている「松戸里やま応援団」が管理する竹林にお邪魔しました。長老から、日本の森林事情および竹の生態を教わり、各グループに付いた指導者から、のこぎりの使い方や複数で作業する心構え、安全に伐採する方法を学びました。教員は、相変わらずの「指示待ち君」がいることを愚痴りながらも、多くは座学の雰囲気と違う積極ある行動が見られたことを頼もしく感じていました。

2日目は、いよいよ竹を使った製作物に取り掛かります。生憎と台風が直撃するとのことで、急遽3日目を中止にすることになり、一日勝負となりました。各グループでは、時間が短縮されながらも集中して製作に取り組みました。はじめて鉋(なた)やドリルを使って、非力さを醸し出していた学生も、慣れてくると最後は楽しく輝き出すのが本科目の特長です。今年は、例年以上にバラエティに富んだ作品群が生まれました。写真を参照してください。最後に、竹林整備体験でご指導いただいたNPO法人「松戸里やま応援団」の皆さまに感謝申し上げます。 ■



上：集合写真 左下：みんなで竹の加工方法のレクチャーを受ける 右下：制作の様子



A 班の作品



B 班の作品



C 班の作品



D 班の作品



E 班の作品



F 班の作品

## 5号館から発見する～既存空間の転用～ 解体前の5号館に8つの異空間

text= 古澤大輔 助教

2018年8月6日(月)から11日(土)の6日間にわたり、夏季集中授業「デザインワークショップ」が開催されました。今年度のテーマは、「5号館から発見する～既存空間の転用～」というもので、47名の学生達が参加しました。後期授業から、新校舎への移転に伴い、私たち建築学科の永年の活動を支えてきた5号館は解体されることになります。そこで、解体される直前にあるこの建築と、最後に向き合っ、既存建物に宿る空間性を感じ取り、そこに転用的な操作を加えることで、新たな空間的な意味を発見してほしい、という想いから、この課題を設定しました。いささか抽象的なテーマのため、どうなるか若干心配していたのですが、学生たちの提案内容は、どれも大変興味深いものでした。

なお、学生たちはA～Hまでの8班に分かれ、4名の指導教員が2班ずつ受け持つ形で行われました。設計課題の中で、唯一協働作業が必要とされるこのワークショップですが、学生たちは、各班ともにチームビルディングを試行錯誤ながら懸命に行い、既存の5号館から空間的特徴を引き出す、個性的な作品を短期間でつくり上げました。

### A班(古澤大輔ユニット1)

「鎮魂 - タマシズメ -」

佐々木諒太郎、藤城隼俊、酒井七瀬、汪恒之、山本晃也、青木怜依奈

5号館で使われたさまざまな紙類、あるいはプレゼンボードなどをシュレッダーにかけて、地下階の廊下にはらまいた空間。ブラックライトによって青白く光っている。地下階全体には、過去に録音された設計講評会の音声と、シュレッダーの音が混ざり合った音源が響き渡る、インスタレーション的提案となっている。

### B班(今村水紀ユニット1)【優秀賞】

「五号館鏡」

福田一也、羅匂謙、三浦日和、佐藤晴菜、佐瀬球、関廣暉

5号館にある既存の鏡を採集して、粉碎することで断片化し、1階ピロティに、幾何学的なサークルを構成した提案。円が持つ力強い形態の中に、周辺の風景が複雑に映り込む、印象的な場が生まれている。刻一刻と変化する太陽の動きに追従するなど、空間と共に時間をデザイン対象としたものになっている。

### C班(雨宮知彦ユニット1)

「White tube」

鳥山亜紗子、山口大毅、金子稜、猿田玲司、中井星馬、千住昂輔

中廊下という既存建物の形式性を強調するように、床と壁を白く塗りつぶして、ホワイト「チューブ」を出現させた提案。見慣れた8階の廊下が一変して、抽象的な純度の高い空間へと豹変している。

### D班(菅原大輔ユニット1)

「CELL」

根本悠太、朝木岳志、高橋ひかる、末吉竜也、角田匡希、石田弘樹

屋上階のエレベーターホールに残された、5号館の特徴のひとつである、プレキャストコンクリート製の開口部を、鏡面で反射増幅させた提案。設置された黒い壁面の穴越しに見下ろすと、あたかも吹き抜けがあるかのような、上下方向へ空間が拡張した感覚が体験できるものとなっている。

### E班(古澤大輔ユニット2)【優秀賞】

「瞬間」

佐藤朝子、濱田昌城、渡邊建斗、田代直生、中嶋大喜

1959年の竣工当時から残る既存タイルを、研った上で宙に浮かした提案。解体現場を瞬間的に切り取ったような表現により、9階から屋上へと至る階段室だけ、時間が凍結されたかのような緊張感が漂っている。

### F班(菅原大輔ユニット2)

「eternity-heartbeat」

長谷川直也、稲野邊義紀、永井優希、王瑞、一柳亮太郎、鈴木礼智

地下のエレベーターホールに、5号館の「心臓」を表現したオブジェを出現させた提案。赤く塗られた既存ダクトが血管に見立てられ、実際の鼓動音が響き渡るインスタレーション。心臓のオブジェには製図室の班名プレートや、壁に貼られていたポスターなどが散りばめられており、記憶の断片が表現されている。

### G班(雨宮知彦ユニット2)【最優秀賞】

「余命」

並木遥、谷寿歩、齋藤圭吾、小高菜生、宗川遼、徳井豊

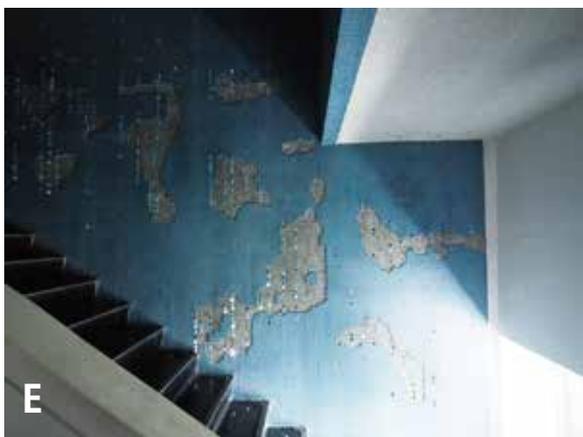
5階の工作コーナーの既存天井を解体し、床面に墨汁を流し込むことで、荒々しい天井の部材を反射させる提案。既存照明器具などを300mmほど下げ、椅子の脚をカットするなど、死にゆく空間として、空間全体が下に沈み込んでいる様子が表現されている。また、時折黒い水滴が落ち、床面全体に波紋が生まれる印象的な空間となっている。

### H班(今村水紀ユニット2)

「五号館の休日」

松本幸起、小室美結、西島陸、倉成湧貴、那須洸太、中田智聡

5階の製図室の特徴である、剥き出しになったダクトを、さらに増殖させ、ダクトが縦横無尽に走り回る空間を提案。既存のコンクリートの柱などが、ダクトが接続されることでパイプスペースに見えるなど、既存の建築エレメントの誤読を誘発する仕掛けが施されている。



## 2年生恒例のオリエンテーション 今年は9つのコースを敢行

text=井口雅登 助教

2018年6月16日(土)に、毎年恒例の2年生オリエンテーションが開催されました。オリエンテーションは、いよいよ駿河台キャンパスで本格的な専門科目の授業がはじまる2年生と、教員との交流を目的としたイベントで、2年生223名、教員26名、補助学生34名の計283名が参加しました。今年度は、江戸東京博物館や江戸東京たても園で少し昔の建築や文化を知るコース、隅田川や銀座周辺で橋やアートなどの実物を見学するコース、防災体験やクラシック音楽鑑賞などの体験型のコース、工場や企業のショールームで製品や製品が作られる過程を見学するコースなど、個性のある計9コースで行われました。2年生の皆さん、建築の専門科目の勉強はこれからです。オリエンテーションでの体験を活かし、顔見知りとなった先輩や先生と共に建築を学びましょう。

■



Aコース「江戸・東京の都市の歴史と文化を体験しよう」なんと天気も持ちこたえ、江戸東京博物館前で記念撮影。



Bコース「防災体験ツアー&350mから眺める東京都市」昼食もオリエンテーションの醍醐味。楽しくいただきました。



Cコース「建築と音響を体験しよう」：メーカーのショールームで実物に触れ、性能を体感しました。



Dコース「最先端の技術がそこにある！ 膜構造と橋梁を巡る大人なクルージング旅」橋を見学しながら、隅田川クルージング旅。



Eコース「水上バスで巡る東京の橋&体験 震度7発生後の東京」皆に見守られながら、地震体験！ 防災意識を高めます。



Fコース「銀座の建築とアートめぐり」なんと、ゴジラが銀座に出現し、一緒に記念撮影！



Gコース「Thermal Design (温熱環境・体感) Acoustic Design (ホール音響・体感)」巨大冷凍庫内の体験ルームで、窓の性能と温熱環境を実体験しました。



Hコース「歴史博物館見学と免震工場見学」見学の合間に、楽しく中華街でランチをいただきました。



Iコース「近世から近代の建築をめぐる 江戸東京たても園散策」前川國男邸にて。実際に見て、触れて、カメラでバシャリ。

vol.45 2018年5月30日(水)

ゲスト：今村水紀(建築家/miCo.)

text = 藤城混俊(3年)

現在、今村水紀先生に授業設計で指導していただいていることもあり、今回オウケンカフェにはじめて参加しました。今村先生は、妹島和世建築設計事務所に勤めていた経歴があり、レクチャーでは、妹島事務所で行っていたことについて、いろいろと話をしてくださいました。印象的だったのは模型の話題についてです。スライドの中に大量のスタディ模型が並べられている写真があり、微妙な違いでもいちばん良いものを追求し、その積み重ねが、「トレード美術館ガラスパビリオン」などの完成度の高い建築を生み出すということ。

また、図面通りにただ模型をつくり、スタディするのではなく、内装を変えるなど、見え方を変えて模型をつくることで、新しい可能性、世界が現れることを学びました。

その後、独立した後のプロジェクトについて、アトリエと組織系の違いや、これから挑みたいテーマなどの話がありました。印象に残っているのは、「原宿のサロン」で、内装を変えられないインテリアデザインという課題に対して、鏡を歪ませて配置することで解いたということを知り、インテリアの表現の奥深さを感じました。 監



vol.46 2018年6月27日(水)

ゲスト：馬場兼伸(建築家/B2Aarchitects)

text = 佐用帆香、森本あんな、湯川智咲、吉田真紀、吉沼彩華(1年)

今回、はじめてオウケンカフェに参加し、レクチャーやその後の議論を聞き、建物のスケールの決め方などはもちろん、知らない概念や用語ばかりで、正直あまり理解をできなかった上に、先生方の鋭い質問や、それに答える馬場さんとのやり取りを間近に見て、より自分の無知を感じました。同じ建築作品ひとつをとっても、受け手にはこんなにたくさんの見方ができ、意見が生まれるものなのかと思ったと同時に、設計者の表現の仕方は、こんなにも複雑にできるものなのかと思いました。

私たちは、建築家は自身の作品に自信ばかり持っているものだと

思っていたので、馬場さんの自らの作品を反省する姿はとても意外であり、印象的でした。建築作品をひとつつくるだけでも、考えなくてはいけないことを挙げ出したらきりがなく、依頼に対して、スケールなどあらゆることのバランスを考えながら、それを形にしていく建築家のすごさを感じました。

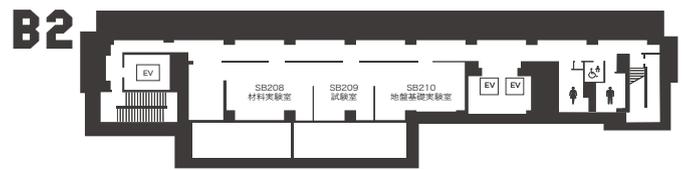
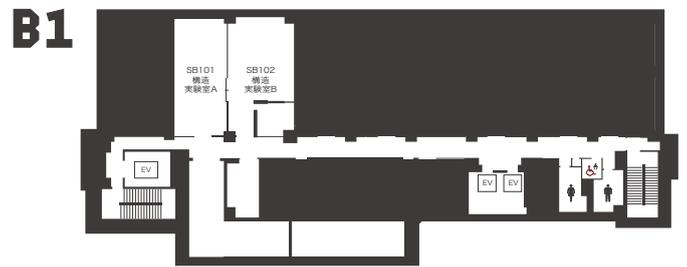
今は受け身にすらなれていないけれども、もっと前のめりに参加できるようになり、たくさんのことを吸収していきたいです。無知な自分に焦るくらいの刺激をもらうことができ、とても勉強になったと思います。 監



## 駿河台キャンパス新校舎愛称は「タワー・スコラ」に 建築学科4年、倉田慧一君の案を採用

text=佐藤慎也 教授

駿河台キャンパス新校舎は、2016年1月の着工から30ヶ月の工期を経て、今年の6月末に竣工を迎えました。夏季休暇中に引越しを行い、後期授業から使用が開始されています。新校舎は、地上18階、地下3階。その内部を少し紹介します。



1～6階には、すべての学生が使用する教室などが入っています。1階の「S101教室」が、この校舎の中で最も大きな教室です。そのほかにも、さまざまな大きさの教室が各階に並んでいます。また、道路に面した「カフェ」には、5号館の1階にあった小野襄先生のレリーフが複製保存されています。「購買」も1階にあります。

7～9階が、私たち建築学科のフロアになります。7階には、これまで製図室と呼んでいた部屋が「スタジオ」と名前を変えて並んでいます。レクチャーを行うための「スライド室」もあります。8、9階には、建築学科のすべての「研究室」が並び、先生方や大学院生たちを中心に研究活動が行われます。環境や構造の実験などが行われる「演習室」もあります。また、実験室も新校舎に集約されています。18階には環境系の実験を行う「音響実験室」が、地下1、2階には構造系の「実験室」が設置されています。建築学科専用の各フロアについては、掲載したフロアマップを参照してください。

さらに、10～17階までは、そのほかの学科の研究室や実験室などが並びます。土木工学科、まちづくり工学科、数学科、電気工学科、機械工学科と共に、ひとつの校舎を使うわけですから、これまで以上にさまざまな交流が行われることが期待されます。

この新校舎の愛称が、理工学部関係者に対して募集され、その結果、応募253作品の中から、建築学科4年の倉田慧一君の案が採用されました。倉田くんの応募作品は、「schola: science and technology」。その案をもとにして、ロボットデザイナーの松井龍哉さんを審査員長とする「駿河台キャンパス新校舎愛称審査委員会」が検討を行い、「タワー・スコラ (La SCHOLA)」という名称が決定しました。

「スコラ」は、ラテン語で「学校」を意味します。学問の場にふさわしい、アカデミックな名称として選ばれました。世界の頂きを目指す理工学部にとっては、国際的にも通じるものであると共に、呼びやすい語感を持ち、親しまれるものとなる必要があります。この愛称のもとに、これからの新たな学問の場が生まれ出されていくことが期待されています。

「タワー・スコラ」の工事はまだ続いています。約60年にわたって建築学科の活動を支えてきた5号館の解体が、ついには10月からはじまりました。5号館の解体後に広場がつけられ、来年6月に「スコラ」全体の竣工を迎える予定です。「駿建」でも、あらためて「タワー・スコラ」の特集を掲載したいと思います。お楽しみに。

## 平成30年度日本造園学会全国大会学生公開デザインコンペにおいて建築学専攻2年の佐藤千香さん、横山大貴君、藤井将大君、稲毛田洸太君、村岡祐美さんが優秀賞を受賞

「平成30年度日本造園学会全国大会学生公開デザインコンペ」（主催：公益社団法人日本造園学会）において、建築学専攻2年の佐藤千香さん（山崎研）、横山大貴君（今村研）、藤井将大君（佐藤光彦研）の作品「連鎖する生命の庭」、稲毛田洸太君、村岡祐美さん（今村研）の作品「『京のたむけ野辺（のべ）』～地形で吊う造園葬～」が、それぞれ「優秀賞」を受賞した。テーマは「『庭』の力を生かした京都の再生」で、一次審査で10点が選ばれ、二次審査会（公開プレゼンテーション）を経て、最優秀賞1点に次ぐ優秀賞3点に選ばれた。

## BOOK AND MAGAZINE

・古澤大輔助教の建築作品「武蔵小杉のオフィスビル増築」（下写真）が、「新建築」2018年4月号（新建築社）に掲載された。掲載号は「アクティベートの手法ーリノベーション17題」と題した特集で、既存建物を再生した事例17作品が紹介されている。

・古澤大輔助教の共著書『福祉転用による建築・地域のリノベーション 成功事例で読みとく企画・設計・運営』（学芸出版社）が刊行された。本書の中で古澤助教は、東京都住宅供給公社と共に取り組んだ団地再生事例について論じている。

・今村雅樹教授の建築作品「熊本県医師会館」が、「近代建築」2018年4月（近代建築社）に掲載された。今村先生は総合監修を担当している。また、構造計画を今川憲英氏、劇場計画を本杉省三特任教授、植栽計画を山崎誠子短大准教授が、それぞれ担当している。

## MESSAGE FROM OB/OG VOL.5

### 大学時代の積み重ねを社会でどう活かすか

田中達也（たなか・たつや）

学部卒業：2013年

大学院博士前期課程修了：2015年

所属研究室：山中新太郎研究室

勤務先：東京都港区役所 街づくり支援部

開発指導課 再開発担当

**市** 街地再開発事業による街づくりの協議や調整などを行う仕事をしています。具体的には、さまざまな公共的な基盤整備について、事業者や港区役所内の関係各課、東京都などと協議を重ね、「都市計画決定」「市街地再開発組合の設立認可」「権利変換計画の認可」などのステップを踏み、事業完了を目指していきます。

現在の職種に就こうと考えはじめたのは、研究室の活動に携わる機会が増えた、博士前期課程1年目ごろでした。講義や研究室活動のグループワークで、皆で話し合い、調整しながら方針を定めていくことが楽しく、またやりがいを感じられたことがきっかけとなり、住民や事業者間の調整を担う行政として、街づくりに携わりたいと考えるようになりました。

仕事を始めて1年目は、仕事の基本である情報のやりとりにとっても苦労しました。相手に情報を伝える際には、情報を順序立てて簡潔に伝えることができず、相手から情報を得る際に



は、要点をくみとり、理解することが満足にできませんでした。そんなときに、大学の研究室で研究テーマを定め、それを検証するために情報を収集し、論を構築し、自らの考えや主張を人に伝える一連の流れを、繰り返し経験してきたことが活かされました。研究とは、情報のやりとりに苦慮しながらも、日々改善していくように務めることでもあります。その大学時代の貴重な経験の積み重ねが、今現在、改善意識を持って仕事に取り組んでいることにつながっています。

日々、仕事に取り組む中で、会社や社会への貢献度は、個人の能力の大小だけでは決まらず、能力の活かし方によるところが大きいと感じています。これから就職活動に向かう後輩の皆さんは、学生時代に必死になって得たものを、就職後、どのように活かそうと考えているのか、わかりやすく説明できるように努めてほしいと思います。

■

## ARCHITECTURE &amp; ME

[連載] 私と建築 vol.93

## 建築物の構造設計と私

text= 古橋 剛 教授

**私**が大学を卒業し、建設会社に就職して構造設計をはじめたのは、**新耐震設計法**施行の直前の1978年であった。当時の耐震設計は、震度法による許容応力度設計であり、保有耐力計算は新耐震設計法（1981年）により導入される。少なくとも、私の周囲の構造設計の現場では、建築物の地震に対する動的な振る舞いや、動的な設計に対する理解はさほど進んでいなかった。そのような状況下で、職業として静的な構造設計を覚えていくことになったが、時代の趨勢の中で、他社の先達の後を追って、私は組織の中で、応答解析による動的設計を担当することになった。少しだけ振動を勉強しただけで、高層建築物の動的設計に従事することになったのである。

当時の動的設計は、今から考えるとたいへん不便な時代であった。構造計画と言っても、ラーメンか耐力壁かの選択肢しかなく、建築物の周期や振動モードを調整することは不可能であり、制振ダンパーというものはまだ存在すらしていなかった。建築計画に合わせて耐力設計した構造を、そのまま設計地震動による応答解析をして（その間に膨大な手作業が要る）、耐えるかどうか検証するという、いわば賭け的なものであった。

石橋克彦氏が、1994年に出版・予言した『**大地動乱の時代**』（岩波書店）が、1995年の兵庫県南部地震で的中する。私の属していた組織は、わが国の中では免震構造の開発が早い方であった。私は、免震の実施設計を担当することになった。この後、数年間は、年間10棟以上の免震構造の実施設計を担当することになる。当時、基準法第38条の大臣認定を評定していた建築センターに、週に数回の割合で通い、評定委員と構造設計の議論をするという時を過ごした。この時代が、いまの私

1954年、東京都生まれ。和歌山県立桐蔭高等学校卒業。1978年、東京大学工学部建築学科卒業。1978～2003年、住友建設。2003～2007年、三井住友建設。2007～11年、日本大学理工学部建築学科准教授。2011年～、同教授。

の血肉の一部となっている。

それまで不自由な耐震設計に苦勞していた私にとって、設計の自由度の点で、免震の設計は目からウロコが落ちるものであった。地震応答を支配する免震層の周期と減衰を、構造設計者が幅広く調整することができるようになったのである。振動モードも単一形に制御できるようになった。このころから私は、職業を聞かれると「**構造設計者**」と応えるようになった（それまでは「社員」だった）。免震の普及は、構造設計のみならず、建築設計にも大きな自由度を与え、新築のみならず、レトロフィットにも適用され、わが国の建築の設計に大きな貢献をしている。

耐震構造はというと、1990年代後半に**履歴型ダンパー**、**粘性ダンパー**が実用化され、減衰が制御できる制振構造化に進み出した。しかし、大規模な建物でしか実現できず、免震ほど効果の差は劇的ではないので、その進展の速度は遅い。しかし、実際には、制振構造は、構造設計の自由度を大きく前進させている。

2006年、**ダイナミック・マス**を用いたモード制御理論（古橋、石丸）を発表し、非免震の制振構造でも、振動モードの制御と周期の調整が可能なることを明らかにした。私は、この理論の発表と共に職を大学に移すことになった。ダイナミック・マスによる入力低減効果は、「**日本大学理工学部5号館**」の免震レトロフィット工事（2007年）に採用された。それから10年が経過した2018年7月、上部構造に世界初となるダイナミック・マスによる部分モード制御構造を用いた、免震構造の駿河台キャンパスの新校舎「**タワー・スコラ**」が竣工する。なんとも感慨深いものである。建築の構造設計は、まだまだ発展途上にある。 〆



写真1：耐震超高層建物の計画時のパース

写真2：耐震超高層建物の外観

写真3：免震設計時代の私

写真4：免震レトロフィット工事の実大モックアップ試験体の前で

写真5：タワー・スコラに設置されたモードを制御するダイナミック・マス（工事中）

# Contents

## 02 [SPECIAL FEATURE]

### 日本建築学会各賞 JIA 新人賞 受賞記念インタビュー

INTERVIEW 1 | 構造と空間デザインの融合 学生とつくり続けてきた 50 年間

| 斎藤公男 × 岡田章 × 宮里直也

INTERVIEW 2 | 「レモン展」のはじまりは学生時代の発案から

| 重枝 豊 × 松永直美

INTERVIEW 3 | 建築は、できすぎてもいけない 適当な具合が必要

| 本杉省三 × 佐藤慎也

INTERVIEW 4 | 日大 OB 3 人の共同設計が生んだ「東松山農産物直売所」

| 馬場兼伸 × 江泉光哲 × 金井 直 × 渡辺富雄

## 15 [REPORT]

- ・短大建築・生活デザイン学科 ものづくりワークショップ
- ・建築学科 デザインワークショップ
- ・建築学科 2 年生オリエンテーション
- ・オウケンカフェ | vol.45 ゲスト：今村水紀(建築家/miCo.) vol.46 ゲスト：馬場兼伸(建築家/B2Aarchitects)

## 20 [NEWS & TOPICS]

- ・駿河台キャンパス新校舎愛称は「タワースコラ」に 建築学科 4 年、倉田慧一君の案を採用
  - ・平成 30 年度日本造園学会全国大会学生公開デザインコンペにおいて建築学専攻 2 年の佐藤千香さん、横山大貴君、藤井将大君、稲毛田洸太君、村岡祐美さんが優秀賞を受賞
- ほか

## 21 [Message from OB/OG]

- vol.05 大学時代の積み重ねを社会でどう活かすか  
田中達也(東京都港区役所/2015 年修了)

## 22 [Architecture & Me]

- vol.93 建築物の構造設計と私 text= 古橋 剛 教授

## 24 [Visit & Criticism]

- 学生建築探訪 vol.7 建築デザインは誰のためにあるのか text = 小嶋玲香(M1 | 古澤・二瓶研)

# SHUNKEN

2018 Oct. Vol.46 No.3

「駿建」

発行日：2018 年 10 月 1 日

発行人：重枝豊

編集委員：佐藤慎也・宇於崎勝也・橋本修・山中新太郎・石鍋雄一郎・

古澤大輔・道明裕毅・堀切梨奈子・廣石秀造

編集・アートディレクション：大西正紀+田中元子/mosaki

発行：東京都千代田区神田駿河台 1-8-14 日本大学理工学部建築学科教室

TEL：03(3259)0724

URL：http://www.arch.cst.nihon-u.ac.jp

※ご意見、ご感想は右記メールアドレスまで<shunken@arch.cst.nihon-u.ac.jp>

# Visit & Criticism

学生建築探訪 vol. 7

## 建築デザインは誰のためにあるのか

text = 小嶋玲香 (M1 | 古澤・二瓶研)

今回取り上げるのは、「新建築」2018年7月号に掲載された、2017年4月にオープンしたSUPPOSE DESIGN OFFICE (以下サポーズ社) による「社食堂」。谷尻誠+吉田愛の建築家ユニット率いるサポーズ社が、事務所移転に伴いリノベーションを行い、その名前の通り、社員の食堂としてだけでなく、社会に開かれた事務所兼カフェをつくっている。当ユニットは建築事務所だけでなく、「社食堂」「絶景不動産」「21世紀工務店」を設立し、設計にとどまらない。



代々木上原駅から徒歩8分。井ノ頭通り沿いのエントランス。(定休日：日曜祝日/営業時間：11:00～21:00)

社員食堂、もしくはオフィスと聞くと、そう簡単に誰もが入れる場所ではない、と考えるはずだ。学生なら、なおさらオフィスに立ち入る機会は数少なく、訪れるのには緊張するだろう。しかし、サポーズ社の「社食堂」は、そのようないわゆるオフィスとは異なる。

まず、入口の扉を開けると、階段で半階下る。右手には天井までそびえる大きな本棚。建築の本や作品集だけでなく、建築を学んでいない人でも興味を持ち、手に取りやすいような本が並ぶ。入口の階段を下ると、左側手前にはカフェスペース、アイランドキッチンを含んで奥には事務所スペースが配置されている。カフェ側の机は大きく、実際に仕事や食事だけでなく、打ち合わせや会話、読書など、さまざまな使われ方がされている。



大きな本棚には誰でも手に取ることができる建築やアートの本が並ぶ。

メニューを見ると、日替わり定食やカレー、海鮮丼などの食事類、コーヒーなどの飲み物メニューを提供しており、カフェとして申し分ない。私は日替わり定食(この日は麻婆豆腐)を食べたが、山椒が効いていて美味しく、非常に健康的でほっとするようなメニューであった。



日替わり定食(麻婆豆腐)は1,188円(税込)。メインのおかずの他に小鉢3品、ご飯、お味噌汁が付く。

さて、同誌に掲載されている阿部仁史による論考「ワークプレイスの現在がしめすもの」を参考に、オフィス空間について考えてみたいと思う。安部は、「都市では近代化とともに働く場と住む場を分ける職住分離という考え方がはじまり、我々の環境や都市・建築はその文脈に基いて作られている」と述べる。確かに都心では、自宅から通勤・通学をして仕事場や学校に通う。しかし、その一方で、現代では、SOHO住宅の普及やシェアオフィス、オフィスにおける余暇

空間の注目度の上昇などに現れているように、「労働の時間が余暇のかたちへと変換され、二極構造であった住環境と労働環境が再び融合し始めている状況にある」。

「社食堂」を見ると、確かに住環境と労働環境という場と行為、両方からの両者の融合を感じることができる。それは、労働という行為が、そもそも暮らしと相補関係にあったことを思い出させ、暮らしは社会の中にあることを実感させられる。建築の設計だけではないデザインを行う谷尻さんらしい方法である。



手前にカフェ・打ち合わせなどのスペース、キッチンを含んで奥に事務スペースが並ぶ。

なるほど、「社食堂」はコンセプトに、「会社の食堂」+「社会の食堂」=「社食堂」と挙げるように、カフェであり、まちに対し開かれている。事務所の人とまちの人が混じり、訪れた人はふるまいを強要されず、自由な社会の食堂であるのだと実感することができる。そして私は、「社食堂」をはじめとして、サポーズ社のデザインに「親しみやすさ」を感じる。「親しみやすさ」とは何であろうか。私はそれを「共有可能なデザイン」ととらえ、より多くの人と共有可能なことが親しみやすいデザインだと考える。しかし、実際に今まで私が訪れたことのある建築家が設計した建物で、親しみやすさを感じたことはとても少ない。例えば、親や建築を学ぶ以外の友人に、その建築デザインの魅力を伝えることは難しいと感じる。だからこそ、まちに開かれた親しみやすいデザインが、むしろ違和感として私の中に残ったのだろう。決してアノニマスでもヒロイックでもない、親しみやすさを感じるデザインが生まれている秘密を、いつかは言語化したいと思う。

誰に向かって、何を届けるデザインなのか、自分の中で建築のあり方を考え直す機会となった。

「駿建」では、在学生、教員、非常勤講師の皆さまからの、コンペやコンクール、学会、スポーツ大会、その他の受賞・表彰に関する情報提供を下記メールアドレスにて受け付けています。<shunken@arch.cst.nihon-u.ac.jp>